

建築と哲学 — 建てることと考えること

建築と哲学について考えるのは、もはや時代遅れでしょうか。というのも、この二つの日本語は文明開化の前夜に成立したからです。しかも、その語源は紀元前5世紀のギリシアに遡ります。西欧の世界では、それ以来、アルキテクトニケーとフィロソフィアという言葉が一貫して用いられてきました。言葉の意味が歴史的に変遷したとはいえ、西欧文化の一端は今でも古代のギリシアに繋がれています。

さまざまな国語の間で、言葉の意味が確実に対応することは望めません。ハイデッガーは、ドイツ語の bauen (建てる、耕す)の語源に buan (住む) や bheu (居る、成る)を見届けました。その意味は「私がある (bin)」ということです。しかし、「建てる」や「立てる」の象形文字に、そのような意味は見られません。この「立てる」は《大地に位置を定めること》を表わしますが、「耕す」という漢字はまた別の行為を示します。印欧語族に限っても、Eng.dwell (住まう)の語源は dwellan (さ迷う)であり、Fr.habiter (住まう)の語源は Lat.habere で、最初は「持つ」という意味でした。ドイツ語の Bildung(教養)は「Bild (形象、似姿)を立てる」に由来し、この語根が「bildende Kunst (彫刻、絵画、建築)」にも残響しています。しかし、人々の教養がそのまま「立-身」に繋がるわけではありません。

「建築」も「哲学」も翻訳の宿命を免れません。そこでは、いつも、原語の解釈が問われます。建築論、建築家、建築士、建築基準法など、関連の夥しい言葉も日本の文化の揺れ動く未来に差し掛けられています。それでもやはり、われわれは母国の言葉で考えます(先人の努力に耳を傾けながら)。—「建築とは何か」、「哲学とは何か」、そして、「建築と哲学」というその「と」とは、いったい何でしょうか？

この二つの事柄がそれぞれ自明とみなされるかぎり、つまり、その「間」に単なる関係が求められるかぎり、問題の核心には至らないでしょう。ところが、そこへ向かう道は固く閉ざされています。先の問いは、すでに、特定の哲学へ踏み込んでいるからです。われわれの《問いかけ》が、「…とは何であるか(繫辭の ist)」という形式に集約されるなら、「主語・述語＝実体・属性」の構造がいつそう強く固定されて、答えの道筋が予め軌道を与えられます。「何らかのもの」のアイデアかうシア、あるいはエッセンティア(本質)などとして・・・。

out-of-date

たとえば、堀達之助『英和対訳袖珍辞書』1862、西畠こよる「希哲学」1861。Cf 伊東忠太(学会論文)1894。

ἀρχιτεκτονική τέχνη,
Pl.*Pit.*251c,Arist.*Pol.*1282a,EN10
94a,*Metaph.*1013a,al.*Po.*1456b.
／φίλοσοφία,Plat.*Phid.*61a,
*Grg.*484c,al.*Euthd.*288d,
Arist.*Metaph.*993b,EN1177a,etc.

Cf.コンピューター用語の ar-
chitecture,Dr.Amdahl,ca.1981.

Fr.bâtir > bastjan,
Fr.habiter > Lat.habitare > habere,
habitus (衣服).
Fr.demeurer > Lat.demoror (停滞
する、停める).
Eng.build > OE.byldan bold (家),
dwell > OE.dwellan,ON.dvelja
(ぐずぐずする、遅れる、留まる).

「建」は「筆」と「廷」の会意で、「墨
繩で行路を定める意」、「築」は「土
を鞏め築くこと」、「立」は「大」と
「一」からなり、「人の立つ位置」を
示す(白川静『字通』)。

Cf.
Deut.Empor-kommen,Fr.parvenir.

Traduttore è traditore.

Deut.Be-ziehung,Fr.rap-port.
Cf. Deut.Verhältnis,Fr.relation.
(関わり)

Subjekt / Prädikat, su-jet / ob-jet.
ὑπο-κείμενον / συμ-βεβηκός.

ἰδέα,εἶδος.
プラトンによるイデア論の用語に
ついて、『全集』別巻 p31-35.
Cf.Pl.*Prt.*315e,*Phd.*109b.
οὐσία, Arist.*Metaph.*1003b,-17b.
ἡ οὐσία καὶ τὸ τί ἐνεῖναι.
substantia ~essentia (A,983a).
τὸ ὄν ἢ ὄντα (Γ,1003a).
essentia,Cicero.*Ep.*58.6.or,
Plautus,*Inst.*2.142.

以下、参考文献は原則として邦訳
のあるものに限る。

そのようにして、建築は、西欧の歴史を通じてさまざまに規定されてきました。近代の美学や芸術学では、その本質が「象徴的芸術」とか「芸術的に形成された現実」などと考えられました。建築の空間は「凍れる音楽」とか「石のスコラ哲学」とも言われました。様式やイコノロジー、機能や形態などの概念も、建築の領域に導入されました。諸技術(芸術)の分類は古代から哲学者の関心を惹きましたが、現代の研究者は、1千点を超える「建築理論」の著作を収録しています。

しかし、そこにはなお、重要な課題が潜んでいます。この場合、「建築するという行為」がまったく捨象されるように見えるからです。「建築されたもの」がひとつの「対象」とみなされ、その「在り方」がさまざまに分析されますが、建築のプロセス(企画、構想、設計、施工、維持管理や保存修復に及ぶ「制作の過程」)は一挙に飛び越えられています。

たしかに、「建築すること」は何らかの意味で「建築されるもの」を目指します。図面や模型や仕様書などが、その道筋を明るく照らし出します。建築することは建築の《現場において》実現され、建築の成果(作品)がそこに蓄積されます。しかし、この後者が前者をすべて包摂するわけではありません。たとえば、ルネサンスの理想都市や「オーダーの規範」、フランス革命期の壮大な建築図面やボザールの絵画図面などに、建築家の能力が《エウ・トピック》に表現されています。

われわれは、いったいどこに迷い込んだのでしょうか？ ここでは、もっと素朴に問いましょう。— 今、仮に、二つの《姿勢》を分節できるとしたら、建築と哲学は、周囲の環境(自然・社会・歴史)に対してそれぞれどのような姿勢を示すのでしょうか？ というのも、建築にかかわる言葉は、しばしば西欧の哲学者を魅了してきたからです。それどころか、中世の神学では《神》が「宇宙の建築家」と呼ばれています。「無からの創造」が、そのような信仰の証しともみなされます。

さて、ハイデッガーは、「哲学—それは何であるか」と問いながら、いわば《二重の無》に触れました。哲学の歴史がひとつの根源的な思索を切り開きました。今やその源に遡って、《形而上学》の意味を聞き取りましょう。そこにもまた、《建築》の観念が認められます。以下の考察では、アリストテレスとウイトルウィウスが導きの糸となります。「住むことのない人間は居ない」し、「何も考えない人間は十分に生きていない」といえるかもしれませんが、はたして、「建てること」と「考えること」とは、「建築と哲学」に摂りまとめられるのでしょうか？

G.W.Fr.Hegel, *Vorlesungen über die Ästhetik*, 1817-29 (長谷川宏訳). Cf. 四日谷敬子『建築の哲学』2004.
D.Frey, *Wesenbestimmung der Architektur*, 1946 (in H.Zörgel, 吉岡健二郎訳).
F. von Schlegel, *gefrorene Musik, Briefen.*, 1806 (鳥田家弘訳—私家版).
G.Semper, *Steinernen Scholastik, Der Stil*, 1860-63 (in 大倉三郎『ゴットフリート・ゼンバーの建築論的研究』1992).
H.Wölfflin, *Prolegomena zu einer Psychologie der Architektur*, 1886 (上松佑二訳).
E.Panofsky, *Gothic Architecture and Scholasticism*, 1951 (前川道郎訳).
H.Greenough, *Form and Function*, 1947.
J.F.Blondel, *Discours.*, 1754 (白井秀和訳).
M.Dessoir, *Ästhetik und allgemeine Kunstwissenschaft*, 1906.
E.Souriau, *La correspondance des arts 1947* (in 森田慶一『建築論』).
H.W.Kruft, *Geschichte der Architektur-Theorie*, 1995 (竺覚曉訳).
σύνγραφη (仕様書), παράδειγμα (模型).
S.Kostof, *The Architect*, 1977 (楨文彦訳).
J.Coulton, *Ancient greek architects at work*, 1977 (伊藤重剛訳).
T.Campanella, *La città del Sole*, 1600-26 (in R.Perugini, *Dell'architettura filosofica*, 1983, 伊藤博明・伊藤和行訳).
E-L.Boullée, (1728-99),
Cl-N.Ledoux (1736-1806),
by E.Kaufmann. 1933.
三宅理一『ボザール建築図面』1987.
R.Descartes(1596-1650) /
G.W.Leibniz(1646-1716) /
I. Kant(1724-1804).
A.Augustinus(354-430), *De Musica, Creatio ex Nihilo*.
Alanus ab Insulis, in O.von Simson, *The Gothic Cathedral*, 1956 (前川道郎訳).
M.Heidegger, *Was ist das— die Philosophie ?*, 1955, *Was ist Metaphysik ?*, 1929.
τά μετα τά φυσικά,
Cf. πρότη φιλοσοφία.